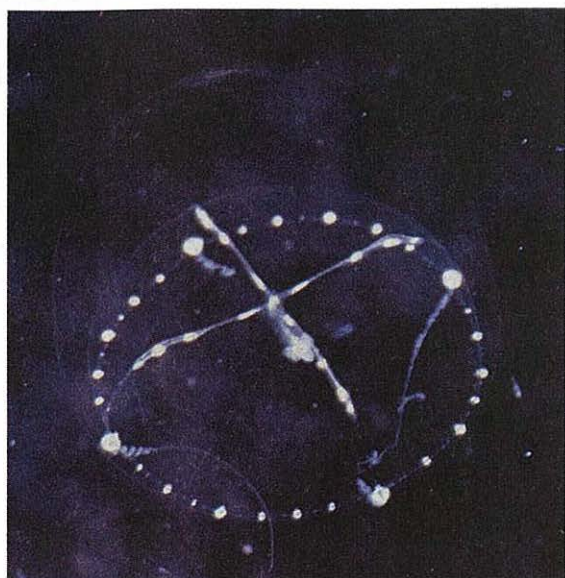


ツブイリスジコヤワクラゲ(仮称)



沖縄県西表島で採取した日本未記録種のツブイリスジコヤワクラゲ

久保田 信

112



今回でこのシリーズを終了する。3年3カ月で、番外編22話を含めて134話を紹介した。最後を飾るクラゲは、まだ学会に正式発表していない

い種で、仮称和名をツブイリスジコヤワクラゲとした。日本未記録のクラゲが田辺湾からいくつも採取されているが、本種は1度採れたきりで、なかなか再発見が難しい。恐らく黒潮に乗って南方からまれに運ばれてくるのだろう。というのも、日本で本種を最初に採集したのは、1990年代に南西諸島で行ったクラゲ類調査の時であった。この小型のヒドロクラゲには特徴がある。ツブイリスジコクラゲと今回和名を付けた

ように、放射管に形成される生殖巣に複数の粒がある。この粒が何なのかは不明である。生殖巣にこのようなものがあるクラゲは見たことがない。という訳で、筋のように見える生殖巣、すなわち子どもをつくる所に粒があるという意味にした。

この生殖巣は放射管と同じ数の4個あることが多いが、それより多い場合もあった。触手は放射管の数だけは少なくとも存在している。将来、触手になるかもしれない膨らみが、傘の周りの4分の1の所に5個ある。糸状体はどこにもないが、傘の縁には平衡石を含む感覚器が多数あり、小さな膨らみの間に形成されている。従って軟(やわ)クラゲ類に所属する。

その他の特徴としては、傘の中央に垂れ下がる口柄(こうへい)の基部に寒天質の柄が形成されていない。それで口柄の先端にある口唇は傘の外へ突き出すことはない。

(京都大学准教授)

|| おわり